香川大学法学部教授会声明

去る7月 2日に行われた香川大学学長選考会議は現学長・一井眞比古氏を次期学長候補者に決定した。したがってその前日に86．4パーセントの高い投票率をもつて行われた意向聴取の結果では、伊藤寛氏が244票を獲得し、一井氏に29票の差をつけて第一順位であつたにもかかわらず、学長選考会議はこの意向聴取の結果とは異なる決定を行ったことになる。

学長選考会議は7月 2日公示においても、また同日付け文書「香川大学学長候補者の選考結果の公表について」においても、一井氏を次期学長候補者として決定するに至った選考理由を実質的に明らかにしていない。

意向聴取に示された全学の教職員の意思を学長選考会議が尊重しなかつたことは、大学の自治と民主主義に対する重大な挑戦であり、今後の大学運営に対する教職員の参加意欲や士気を著しく低下させる危険性をもっている。また選考会議がこうした決定を下すに至った理由を明らかにしていないことは、教職員に対して負っている説明責任を果たしていないのみならず、学生および社会に対して公正な大学運営について疑念を抱かせるものである。

また7月 24日付の一井次期学長候補者の所信「学長の再任に当たって」は、今回の意向聴取の結果をこれまでの大学運営への批判として十分に受け止めることなく、既定の「将来計画」の実施を主張している。

1. 香川大学法学部教授会はこの学長選考会議の決定に強い遺憾と憂慮を表明するとともに、選考会議が意向聴取の結果をどのように参考にし、いかなる理由により一井氏を次期学長に適任と判断したかについて、説明を求める。

2. 法学部教授会は、一井次期学長候補者に対して、意向聴取の結果をこれまでの大学運営に対する根本的な批判として真摯に受け止め、今後一層の注意を払って各部局の意見を尊重しつつ、教職員の合意形成を誠実に探求し、大学運営に当たるよう要望する。

2009 年 8 月 7 日